日本ビジネス実務学会
Japan Society of Applied Business Studies
2017年3月1日発行

# 中部ブロック会報 第31号

平成28年度中部ブロック研究会 【1日目】2017 年1月28日（土）【2日目】2017年1月29日（日）
開催地：中部学院大学（各務原キャンパス） 〒504-0873 岐阜県各務原市那加甥田町30-1

## 【平成28年度・中部ブロック研究会を終えて】

ブロックリーダー 手嶋 慎介

2017年1月28日・29日の2日間、中部学院大学様において、今年度のブロック研究会が開催されました。今回は約20名の会員等、プレゼンテーション・コンテスト出場学生7名のご参加をいただき、大変賑わいのある研究会となりました。会場を快くご提供いただき、かつ、物心両面にわたりご支援を賜りました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

今期の本ブロックの活動としては、引き続き、共同研究の推進に重点を置きたいと思います。最終頁、共同研究助成公募のお知らせをご確認ください。

高等教育機関を取り巻く環境は厳しさを増すばかりですが、ブロック会員の皆様には、より一層の研究会活動へのご参加・ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

## 1/28 ワークショップ 講師 宇田 光先生（南山大学）

【講義で実現できるアクティブ・ラーニング－当日ブリーフレポート方式を中心に】

## 1/29 特色ある取組事例 講師 大勝 志津穂先生（愛知東邦大学）

【産学連携による人材育成－愛知東邦大学×（株）名古屋グランパスエイトの取組を中心に－】

宇田 光先生

大勝 志津穂先生

初日には、南山大学教職センター、総合政策学部総合政策学科教授の宇田光先生をお招きして、ワークショップを開催しました。「講義で実現できるアクティブ・ラーニング」という、教室内での講義科目を念頭に置いたものでした。講義時間内にレポート作成のための「構想」の時間を設定し、レポートを作成・提出、学生の学びを深めます。「これをはじめると、普通の講義には戻れないですよ！」という宇田先生の言葉は印象的でした。残念ながらご欠席となられた方には、先生のご著書『大学講義の改革－BRD方式の提案』を一読されることをおすすめいたします。

2日目には、愛知東邦大学経営学部地域ビジネス学科准教授の大勝志津穂先生をお招きして、（株）名古屋グランパスエイト連携の取組事例を報告をしていただきました。取り組みの中には「コラボグッズの企画・販売」などのビジネス実務的内容も含まれていますが、大勝先生は「スポーツ社会学」がご専門です。また、女子サッカー部の監督をされるなど、プロジェクトを通して大変熱心に学生の汎用的能力育成に注力されています。正課内外を問わず学生と関わることの大切さ、組織的取り組みの重要さなど、示唆に富んだご報告をいただきました。

いずれも本研究会の充実につながる内容となりました。ありがとうございました。

---

＜第35回全国大会が無事終了しました ありがとうございました＞

・実行委員長 岡野絹枝（金城大学短期大学部） ※敬称略
・副委員長 北潟克輔（金城大学）
・本部副会長 米本倉基（藤田保健衛生大学）

平成29・30年度のブロック運営委員

・ﾘｰﾀﾞｰ 手嶋慎介（愛知東邦大学）
・ｻﾌﾞﾘｰﾀﾞｰ 加納輝尚（富山短期大学）、河合晋（岡崎女子短期大学）
・運営委員 若月博延（金城大学短期大学部）※第３５回全国大会事務局長
・運営委員 岡野大輔（金城大学）、奥村実樹（金沢星稜大学）
中川雅人（中部学院大学）、西川三恵子（九州共立大学）

## 研究発表①【クリッカー活用による診療情報管理士取得教育の取組み】

米本　倉基（藤田保健衛生大学）

本研究は、能動型学習や学生参画型授業が有効とされるクリッカーを診療情報管理士資格取得対策として導入し、その効果を把握することを目的とした。方法は、試験対策授業を受ける大学３年生43名に対して授業内で10回、クリッカーによる練習問題を行い、授業後に学習の役立ち度と学習意欲への２つの効果をアンケートによって評価した。その結果、役立ち度に関しては44％の学生から肯定的な評価が、また、学習意欲への効果では、40％の学生から肯定的な評価を得た。

このことから、クリッカーは診療情報管理士試験対策に一定の効果があることが解った。一方で、属性別では、性別で、役立ち度において、男子学生より女子学生の割合が低かったが、その他の成績、授業態度、合格への自信度で役立ち度に有意な差はなく、学生の学習スタイルによって差ではなく、別の要因で個人差があることは示唆された。

## 研究発表②【医療ツーリズムのグローカル展開への可能性　―日本とアジア主要国医療ツーリズムの現状・課題の比較―】

米田　迪（金城大学）・北潟　克輔（金城大学）

米田　迪先生

周辺アジア諸国では医療を国家観光資源とし、国際医療患者を積極的に取り込んでいる。

一方、日本では医療観光が地域や病院に大きな利益をもたらしているわけではない。周辺アジアJCI認証病院では、自由診療方式を導入しており、病院の医師が、主にビジネスとして医療活動にあたる。雇用・賃金・査定・就業制度や医事・薬事の関係法も違う。日本の保険制度、医療制度やホスピスの精神とは隔絶感もある。しかし、従来の『メディカル・ツーリズム』から『ヘルス＆ウェルネス・ツーリズム』という広義の医療観光に軸足を変え、石川県における観光資源と各病院・医院などへ効果的に国際医療患者とその家族を循環させる地域ビジネスの仕組みと人材育成を研究していると、「画像・言語認識、行動とプランニング、他者理解、高度翻訳、蓄積した言語知識獲得」のIoT・AT・ロボットの活用による医療通訳翻訳や空港エスコート、カウンセリングなどのコーディネイト役となる新しい人材確保・育成、アレンジ事業創出が急がれるビジネス課題として浮かび上がる。

## 研究発表③【ビジネス実務のための法学・経営学・会計学～ビジネス実務教育を支える専門教育のための教材開発を通じて～】　＜中部ブロック研究会助成共同研究＞

岡野大輔（金城大学）・奥村実樹（金沢星稜大学）・加納輝尚（富山短期大学）・中原亜紀美（金城大学短期大学部）

岡野　大輔先生

本研究は、標記の教材開発を通じて、ビジネス実務の学際的意義を明らかにし、ビジネス実務が援用している法学や経営学・会計学などの専門領域に関する事項を、ビジネス実務教育においてどのように展開すべきか、ビジネス実務教育における専門教育のあり方について考察することを目的とする。ビジネス実務教育「を支える」専門教育といった場合の「専門教育」とは、「ビジネス実務教育の構成要素として、他の専門領域から援用された基礎的概念や方法などに関する教育」であり、ビジネス実務の構成要素となっている他の専門領域からの援用部分につき、これをさらに深化させて学ぶことを目的とする教育を「ビジネス実務を学ぶ者のための専門教育」と考える。そして、ここでの法学や経営学、会計学は、ビジネス実務を学ぶ者のためのものとして、より実践的な内容であって、ビジネス実務の体系に適ったものとして再構成されたものであることが求められると考える。

## 研究発表④【ビジネス実務から考える会計教育 ―全国ビジネス系学科のカリキュラム調査を踏まえて―】

河合　晋（岡崎女子短期大学）

企業では簿記を巡る一連の手続きが行われるが、こうした経理業務は歴史的に見ればついこの前までは全て「手書き」で行われていた。しかし、1970年代後半「会計事務所専用機型会計ソフト」の登場、1980年代後半「パッケージ型会計ソフト」の登場により、経理業務はコンピュータを利用した会計処理へと変化した。さらに、本格的な高度情報社会の浸透により、2010年頃から「クラウド型会計ソフト」が登場し、主に中小企業や会計業界に大きな影響を与えている。こうした環境変化を概観し、簿記教育、特にコンピュータ会計教育の現状を調査、考察することが本稿の目的である。

その結果、現状では、コンピュータ会計教育の在り方が確立されているとは言えず、先行研究の2000年調査と比べると、コンピュータ会計や会計情報論の授業が増加してきたとはいえ、その割合はまだ多いとは言えない。会計現場がコンピュータ化されても、簿記の本質理解のためには「手書き」簿記教育は今後も大きく変わる必要はない。しかし、会計現場に与える影響が大きい「クラウド型会計ソフト」の登場は、簿記会計教育の現場にも影響を及ぼし、主に中小企業の会計現場の動向を注視する必要があろう。

## 研究発表⑤【プロジェクト型教育の継続性に関する意義とその困難性に関する一考察】 奥村　実樹（金沢星稜大学）

プロジェクト型教育（報告者が平成25年度の中部ブロック研究会において「課題解決型プロジェクト教育」として報告したもので、問題解決、社会体験、少人数教育の要素を満たす外部と関わって活動をおこなうPBL）は、地域や地元企業と連携したり、アクティブ・ラーニングの教育効果を発揮したりという面からの期待で全国的に普及している。他の教育ではさほど考慮の必要がないがプロジェクト型教育では大いに考える必要のある問題として、プロジェクト自体の根本的な方針にも関わってくる「継続性」がある。通常の講義・授業においては、基本的な教育体系を次年度も繰り返すことが第一選択であろうが、プロジェクト型の場合は、次年度の計画を毎年考える必要があるからだ。その解決の手がかりとなるよう提示したものが、プロジェクトを「方法」と「内容」の2軸を元に4象限に当てはめたモデルであった。それを、発表者がおこなってきた活動を例とし説明していった。

## 研究発表⑥【本学 経済学部におけるビジネス実務教育の取り組みについて】
西川　三恵子（九州共立大学）

2016年4月に赴任した大学の所属は経済学部であり、全国大学実務教育協会が付与するビジネス実務士の称号の必修科目である「ビジネス実務概論」「ビジネス実務演習」を担当しているが、やはり学部を取り巻く科目群ならびに受講学生の意識調査を踏まえ、本学のカリキュラムポリシー、ディプロマポリシーなどとともに検証し、今後のカリキュラム構築の一助とするべく考察を試みた。

本学経済学部の変遷をたどれば、1968年に経営学科が増設され、2005年には経営学科にビジネスコミュニケーションコースが設定され、経営学科では上級ビジネス実務士、経済学部ではビジネス実務士の称号が取得可能とされており、ビジネス実務教育がなされていたことが読み取れた。

さらに、2014年の入学生まではこの旧カリキュラムが適応されており、他コースの学生でも就職先に一般企業を意識している学生がビジネス実務能力の知識習得に意欲的であることが集計結果からも理解できた。

## 研究発表⑦【診療所が重視する医療事務教育についての一考察】
黒野　伸子（岡崎女子短期大学）・河合　晋（岡崎女子短期大学）

黒野　伸子先生

医療機関におけるIT化は、診療所の業務環境を大きく変えているが、教育機関での教育内容が医療機関に評価されているかは疑問である。本発表では、先行研究から診療所が重要視する医療事務教育を抽出・整理した上で、アンケートを実施し、診療所は教育機関の医療事務教育が役立っていると思っているか、及び診療所が重要視する医療事務の教育内容は何かを明らかにしようとした。その結果、概ね診療所は教育機関で行われる医療事務教育は業務に役立っていると感じていることが分かった。診療所業務での役立ちと教育機関の医療事務教育との関係では、「患者接遇」、「Excel・Word」、「レセプト作成」、「レセコン操作」が、診療所において重要とされる教育内容であると認められた。多くの診療所は、教育機関が行う医療事務教育は業務に役立つとしているが、それだけで教育機関の質が高いと判断することはできない。今後も重視される教育内容の精査を行う必要がある。

## 研究発表⑧【インターンシップの現状と課題―各事例を題材として―】
松﨑　陽子（金沢星稜大学女子短期大学部）・小里　千寿（NPO法人キャリアサポート協会理事長）

小里　千寿先生

本発表では、現在のインターンシップの傾向を３大学（新潟大学・長岡大学・金沢星稜大学）への聞き取りで探ることにより、産学双方にとって今後のインターンシップの望ましい在り方についての提言を行うことを目的とした。聞き取りの結果、従来型の大学主導によるインターンシップから文科省「地（知）の拠点大学によるCOC＋事業としてのインターンシップへの移行（もしくは共存）が進んでいることがわかった。学生の参加率が上がる等の良い面もあるが、大学がその独自性を失い、行政に丸投げする形にあることが危惧され、地元人材確保のためのインターンシップになっているように思われた。

従って、これまで筆者らが関わってきた大学主導のインターンシップを例に挙げながら、インターンシップの位置づけの明確化の必要性や、受け入れ企業にとってのメリットを再度確認しつつ、大学と企業が共働しながらトータルな仕組み作りをする必要性について提言した。

## 【懇親会 in 中部学院大学】　ブロック運営委員　若月　博延（金城大学短期大学部）

昨年の日本海側と違い、太平洋側での開催ということもあり、夜でもそれほど寒くない中で懇親会が開かれました。研究会に引き続いての会でしたので、参加者は、会員が14名とそれほど多くはなかったですが、大学内での開催ということでノンアルコールの会になりましたので、直前まで開かれていた学生プレゼンコンテストの出場者も参加してくれ、さらにお手伝いいただいた中部学院大学の学生も混じり、会場はいつもと違った若い雰囲気に満ちていました。

金城大学北潟先生の御発声で乾杯の後は、会員と学生が混じりながら、また学生同士、他の大学の学生とも交流しながらの交流会は、人数を超える盛り上がりがあったように感じます。食事もケータリングでたくさんの量があり、参加者は美味しい料理に舌鼓を打っていました。また、会員も気心知れたメンバーで、研究発表の時間では足りなかった活発な議論があちらこちらで飛び交っていました。

## 【学生プレゼンテーション・コンテスト】　審査委員長　米本　倉基（藤田保健衛生大学）

**最優秀賞：竹内愛理沙（名古屋経営短期大学1年）**
**優 秀 賞：安藤綾花（名古屋経営短期大学1年）、佐木志保梨（富山短期大学1年）**
**奨 励 賞：橋本怜奈（金城大学短期大学部1年）、濱田直希（愛知東邦大学2年）、宮田真里（富山短期大学1年）、米原千裕（金城大学短期大学部1年）**

審査のポイントである①説得力・印象②内容③コミュニケーション力④機器操作のいずれの発表者も高水準で、得点に差がなく審査に大変苦労しました。

そんな中で、最優秀賞の竹内さんの顔の表情、特に相手を惹きつける目の輝きの良さが受賞の決めてとなりました。また、優秀賞の安藤さんと佐木さんの話し方は、自然体で素直な人柄が聴衆に伝わるものがありました。但し、繰り返しになりますが、参加者７名全員、すばらしいプレゼンで、賞の優劣ほど、実際の内容に差はなかったと思いますので、ぜひ、この経験を自信に結びつけて、大いに飛躍してもらいたいと思います。

## お知らせ①【全国大会　ぜひご参加ください】
## 大会統一テーマ『ビジネス実務における専門教育を考える』

**<大会日程及び会場>2017年6月10日（土）・11日（日）、神戸大学・農学部（神戸市灘区）**

２日目シンポジウム「ビジネス実務における専門教育を考える」（中部ブロック・富山短期大学准教授加納輝尚先生がパネリストとして登壇）など、盛りだくさんの内容です。

## お知らせ②【中部ブロック共同研究助成　公募】
## テーマ『ビジネス実務におけるプレゼンテーション教育・学習法の再検討』

**<概　要>**　近年、プレゼンテーションは、ICTの発展に伴うビジネス実務におけるスキルとしての一般化、一般社会常識としての広がりがみられる。教育現場では、学生によるインターンシップ・PBL成果報告会などの実施に伴う教育・指導の必要性が一層高まっている。本研究では、ビジネス実務教育や専門教育との関連において、その再検討を行うものとする。

**<助成額>** 3万円　**<応募締切>** 3月21日（火）**<決定>** 3月31日（木）

**※お問い合せ・応募先メール**　tejima.shinsuke@aichi-toho.ac.jp（手嶋）

## 【編集後記】　ブロックサブリーダー　加納　輝尚（富山短期大学）

平成28年度中部ブロック研究会は、中部学院大学での初開催の運びとなりました。ワークショップでは、南山大学 教職センター 総合政策学部総合政策学科の宇田 光教授をお招きし、前年度に引き続き、教育上重要な「アクティブ・ラーニング」について、具体的で実践的な内容をご教授いただきました。恒例の学生プレゼンテーション・コンテストでは、甲乙付けがたいハイレベルなプレゼンが行われ、研究発表では、ブロック助成共同研究報告をはじめ、各先生方の精力的な研究を共有できる貴重な機会となりました。今後、会員の先生方のご協力を得ながら、引き続き中部ブロックの研究会活動を盛り上げて参りたい所存です。何卒よろしくお願い申し上げます。